

## ビデオ『バランゴンとバナナ村の人々』

フィリピン・ネグロスのバナナは、どんな人びとの手を通して食卓まで届くのか。『バランゴンとバナナ村の人々』は、その全行程を初めて紹介したビデオです。舞台は1990年代初頭、バナナの産地であったラグランハ地区。ネグロス島中央部にそびえたつカンラオン山の腹に広がる通称「バナナ村」です。60kg以上もあるバナナを天秤棒で担いで、山を越え、川を渡って集積所まで運ぶ生産者たち。運ばれてきたバナナを夜通し水洗いをし、乾燥させて箱詰めをするパッカーたち。人から人へ、手から手へ渡されるバナナ。何と1回の出荷に600家族が関わっていたそうです。まさしく人海戦術です。



バナナは温度管理が難しい果物です。プランテーションでは収穫してから24時間以内に冷蔵して、そのまま日本まで運んでいます。道路もない山中から、それが可能なのだろうか。バナナ業者からは「素人にバナナの輸入ができる訳がない」「無謀だ」と揶揄されたそうです。しかし、手探りの状態で試行錯誤を繰り返しながら、バナナを日本に届ける仕組みを整えることが出来たのです。それを実現させたバランゴン交易にかけ人びとの熱い思いが映像から伝わってきます。

ATJは過去30年間に民衆交易事業や商品に関するさまざまなビデオやブックレットなどを制作してきました。創立30周年を機にウェブサイトでも見られるようにしていきます。乞うご期待!

『バランゴンとバナナ村の人々』(1992年制作/26分)  
 http://altertrade.jp/archives/18925



特定非営利活動法人 APLA (Alternative People's Linkage in Asia)  
 フィリピン・ネグロス島の30年以上の経験を活かし「農を軸にした地域づくり」のためのネットワークの構築を目指して、出会いや交流の場の創造を進めています。 [www.apla.jp](http://www.apla.jp)

株式会社オルター・トレード・ジャパン (ATJ)  
 バランゴンバナナやエコシュリンプなどの食べ物の交易で、生産者と消費者の顔と顔が見える関係でつなぎ、人と人、自然が共生できる社会づくりを目指しています。 <http://altertrade.jp>

〒169-0072 東京都新宿区大久保2-4-15 サンライズ新宿3F  
 TEL03-5273-8160 FAX03-5273-8667 MAILinfo@apla.jp

過去のPtoP NEWSはこちらから

特定非営利活動法人 APLA

# 人から人へ PtoP NEWS vol.34 2019.10

特集

ATJ30周年  
 広がる協同のネットワーク



初代マスコバト製糖工場



## パラン【大ナタ】



## インドネシア

パプア州の山間部で必ず目にする光景は、大ナター一本を手に森で採取した収穫物を担ぎながら家路に向かう人びとの姿です。日本の皆さんがスーパーマーケットに買い物に行くように、パプアの先住民は森で食材を調達します。大ナタのことをパプアでは「パラン」と呼びます。食べ物を探したり、罾で仕留めた獲物をさばいたり、家財道具を作ったり、と生活に必要な作業の大半はパランを使って行います。カカオの栽培・収穫に使う道具もパラン一本のみ。下草刈りや木の剪定をしながらカカオを育て、赤や黄色の大きな実(カカオポッド)を収穫し、その実を手のひらにのせパランで切れ目を入れて中の種(カカオ豆)を取り出します。パランがポッドに深く入り過ぎると種を切ってしまうので、パランを振り落とす力を微妙に調整しなければなりません。でもそこは皆とても上手く、小さな子どもでもパランを巧みに使いこなします。

種々雑多な道具に囲まれている消費大国の私たちにとってパプアの人びとがパラン一本で日々暮らしを営むことができる能力は感嘆に値します。

津留歴子(つる・あきこ/カカオキタ社)



産地の暮らしを垣間見る  
 1枚の写真から

## 山間部のネルドリッ

from 東ティモール

コーヒー 抽出方法の最高峰とも言われるネルドリッ。管理が面倒なため普段使いにチョイスする家庭は少なく、コーヒー好きの専売特許と見られている向きもあります。けれども、真剣に考えると必要なのはほぼ布だけ。実は最も身近な抽出器具かもしれません。果たして、東ティモールの山間部にあるコーヒー農家にお邪魔するかまどの横には汚れたルーズソックスと見紛うネルドリッ器具が、自分たちで作ったコーヒーを中華鍋で焙煎し、臼と杵で粉砕し、布で濾して飲む。老若男女、みな飲む!これほどまでにコーヒーが生活に調和している様子を、私は他に知りません。最高峰の淹れ方ですから、当然味もグッド。1960年代を過ごした皆さん、ぜひタンスの隅に眠るルーズソックスを再利用……とまでは言いませんが、気軽にネルドリッを試してみたいかと思うか。

若井俊宏(わかい・としひろ/ATJ)



今年2019年、オルター・トレード・ジャパン(ATJ)は創設30周年を迎えました。ATJには前史があります。1980年代半ばに砂糖の国際価格が暴落したことをきっかけに、「フィリピンの砂糖壺」と呼ばれていたネグロス島で飢餓が発生しました。深刻な事態を受けて、86年、日本ネグロス・キャンペーン委員会(JCNC、2008年APLAに再編)が設立され、飢餓に対する緊急救援を開始しました。しかし、農園労働者が支援に依存せず、事業を起して自立することを応援するため、初の「民衆交易」商品であるマスコバド糖(黒砂糖)の生産、87年に日本への輸入が始まりました。その後、マスコバド糖に続いてパラゴンバナナの輸入が構想された89年、生活協同組合(生協)、JCNCをはじめとする市民団体や個人による市民事業体としてATJが設立されたのです。

今年2019年、オルター・トレード・ジャパン(ATJ)は創設30周年を迎えました。ATJには前史があります。1980年代半ばに砂糖の国際価格が暴落したことをきっかけに、「フィリピンの砂糖壺」と呼ばれていたネグロス島で飢餓が発生しました。深刻な事態を受けて、86年、日本ネグロス・キャンペーン委員会(JCNC、2008年APLAに再編)が設立され、飢餓に対する緊急救援を開始しました。しかし、農園労働者が支援に依存せず、事業を起して自立することを応援するため、初の「民衆交易」商品であるマスコバド糖(黒砂糖)の生産、87年に日本への輸入が始まりました。その後、マスコバド糖に続いてパラゴンバナナの輸入が構想された89年、生活協同組合(生協)、JCNCをはじめとする市民団体や個人による市民事業体としてATJが設立されたのです。

## 社名に込められた意味

「オルター・トレード」という社名は、英語の「オルタナティブ」(もうひとつの、代わりの、という意味)に由来しています。これには2つの意味が込められています。募金を集めて貧困を解決するためのプロジェクトを実施する従来の国際協力の手法ではなく、国境を越えて市民が協力して経済活動を立ち上げ自立を支援するという、開発の在り方としてのオルタナティブです。

もう一つは生産者と消費者の関係の在り方です。ATJが設立された89年はちょうどバブルの時代の絶頂期、日本人の「飽食」がアジアの

人びとの暮らしや環境を犠牲にして成り立っているという批判が起きていました。フィリピンのミンダナオ島にある大規模なプランテーションで生産されるバナナや、台湾、インドネシア、タイといったアジア各地で造成された集約型養殖池で生産されるエビなどがその典型です。そうした収奪的な消費を推し進めるのではなく、顔の見える交易を通じて互恵的な関係の橋渡しをするための会社がATJだったので。

民衆交易はJCNCに結集した市民による国際協力に、安全・安心な農産物の生産・消費により環境や地域農業を守るという生協による産直提携事業が会って生まれたといってよいでしょう。

## 韓国にも広がった民衆交易

その後、マスコバド糖、パラゴンバナナに続いて、フィリピン以外の国々と様々な商品の交易が始まります。粗放養殖エビ「エコシュリンプ」(1992年、インドネシア)、コーヒー(93年、東ティモール、ラオスなど)、グランドの塩(2002年、フランス)、オリーブオイル(04年)、カカオ(12年、インドネシア・パプア州)などへと展開します。現在、ATJが取扱うのは7品目、その産地は12カ国に広がっています。さらに2000年代以降は、韓国の生協もマスコバド糖や東ティモールのコーヒー、パレスチナのオリーブオイル、パラゴンバナナなどを輸入するようになり、消費する側の横のつながりも生まれています。

り、消費する側の横のつながりも生まれています。

エコシュリンプはインドネシアで古くから続く環境保全型の地場産業を守り、コーヒーの安定的な買い付けは国際市場の相場に左右される生産者の暮らしを支え、パレスチナの農民がイスラエルの占領下で作るオリーブオイルを買い支えることが土地を守ることに繋がります。それぞれの商品の交易が地域の課題解決の一助となり、生産者や産地の住民が抱える政治経済的な諸問題を日韓の消費者に伝えるメディアとなっています。

## 「キタ」の精神は民衆交易のDNA

もっとも新しい民衆交易品はインドネシア・パプア州のカカオで作るチョコレートです。パプアでカカオの集荷・加工・輸出、生産者支援を行う事業体が「カカオキタ社」です。インドネシア語で「キタ」とは、私とあなたを含む「私たち」という意味。カカオを生産する人、加工する人、出荷する人、チョコレートを製造する人、食べる人、そしてカカオを育む大地と森も含めすべての仲間が協働することをイメージしてこの社名がつけました。

代表のデッキー・ルマロベンさんは、事業によって「みんなで一緒に幸せになる」という考えを大切にしています。経済のグローバリゼーションが進むに伴って、「持てる者」と「持たざる者」の格差が大きくなっています。温暖化や異常気象などの環境問題も待たなしの深刻な状況です。そうした状況下であるからこそ、国境を越えて生産者と消費者が「キタ」という意識をもってつながり、持続的な農業生産、暮らしや地域づくりを進めるといった民衆交易の意義がますます重要になっているのだと感じます。

小林和夫(こばやし・かずお/ATJ)



ATJの取り扱い商品(左から):パラゴンバナナ/マスコバド糖/エコシュリンプ/パレスチナのオリーブオイル/コーヒー/カカオ/グランドの塩  
各商品についての詳細は☞ <http://altertrade.jp>

